

大橋E遺跡 5

— 福岡市南区所在大橋E遺跡第7次調査報告 —

2003

福岡市教育委員会

大橋E遺跡 5

— 福岡市南区所在大橋E遺跡第7次調査報告 —



遺跡名
大橋E遺跡

遺跡番号
D O E - 7

調査番号
0 1 1 1

2003

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところです。

本報告による大橋E遺跡第7次調査では中世から近世初めの遺構と遺物を多く確認することができ、当時の集落を知る上で貴重な成果を挙げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとするご協力を頂いた、山浦正継氏をはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　言

1. 本書は平成13年度（2001年度）に福岡市教育委員会が実施した大橋E遺跡第7次調査の発掘調査報告書である。調査地点の所在地は下表によられたい。
2. 遺構の実測は、久住猛雄・藏富士寛・阿部が行った。
3. 遺物の実測は、平川敬治・阿部が行った。
4. 製図は、阿部が行った。
5. 写真撮影は、阿部が行った。
6. 遺構番号は、全遺構の通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構番号は
獨立柱建物（SB）・土壤（SK）・溝（SD）・ピット（SP）である。
7. 遺物番号は、通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6° 21' 西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される
ので活用されたい。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

大橋E遺跡第7次調査

遺跡調査番号	0111		遺　跡　略　号	OOE-7	
調査地地籍	南区大橋4丁目16-18		分布地図番号	39-2382	
開発面積	1,053.16m ²	調査対象面積	430m ²	調査面積	425.3m ²
調査期間	平成13年5月15日～平成13年7月11日				

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 平成13年度の調査体制	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	4
第3章 発掘調査の記録	
1. 調査概要	4
2. 発掘調査の記録	4
1) 掘立柱建物	4
2) 溝	4
3) 井戸	10
4) 土壙	11
5) 柱穴出土の遺物	12
3. まとめ	12

挿図目次

Fig. 1 調査区位置図(1/4,000)	2
Fig. 2 調査区全体図(1/200)	3
Fig. 3 SB01建物実測図(1/40)	5
Fig. 4 SD09・10・11溝土層断面実測図(1/30)	5
Fig. 5 SD09溝出土土器実測図(1/3・1/4)	6
Fig. 6 SD10溝出土土器実測図(1/3・1/4)	7
Fig. 7 SD11溝出土土器実測図(1/3・1/4)	7
Fig. 8 SD11・54溝出土遺物実測図(1/3)	8
Fig. 9 SD54溝出土遺物実測図(1/3)	8
Fig.10 SE03・63井戸実測図(1/40)	9
Fig.11 SE03井戸出土遺物実測図(1/3)	9
Fig.12 SK05・06・07・08・14・17実測図(1/40)	11
Fig.13 SK土壙出土土器実測図(1/3)	12
Fig.14 SK05出土土馬実測図(1/3)	12
Fig.15 SP50ピット出土石器実測図(1/2)	12

図版目次

PL. 1 1:調査区全景(北より) 2:植張区全景(北より)

PL. 2 1:SE03井戸完掘状況(西より) 2:SK14土壤(東より) 3:SK16土壤(西より)
4:SK17土壤(南より) 5:出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成13年4月27日付けで、山浦正継氏より本市教育委員会宛に南区大橋4丁目633-12他（面積：1,053.16m²）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。（事前審査番号：13-2-789）。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である大橋E遺跡に含まれていることから事前調査が必要であると判断し、同年5月10日に試掘調査を行った。その結果、良好な遺構が検出され、この試掘調査結果をもとに両者で協議を行ったところ、基礎工事に伴う杭打ちにより遺構の破壊を免れないため、住宅部分を対象に本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、同年5月15日より発掘調査を行うこととした。

なお、発掘調査においては、山浦正継氏および施工業者の（株）起産建設をはじめ、関係者のみなさまに多大なご協力とご理解をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体	山浦正継
調査主体	福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括	埋蔵文化財課長 山崎純男 同課調査第1係長 山口謙治（前任）力武卓治（現任）
調査庶務	文化財整備課 御手洗清
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長 田中壽夫（前任）池崎謙二（現任） 同課事前審査係文化財主事 田上勇一郎
調査担当	同課調査第1係 阿部泰之
整理作業	窪田慧 獅早苗
調査作業	小柳和子 網田美代野 平田政子 森山早苗 倉光京子 井上紀代子 倉光アヤ子 和田裕見子 結城千賀子 細川虎男 吉鹿裕隆 大原政幸

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

大橋E遺跡は、福岡平野を貫流する那珂川の中流域右岸に分布する沖積微高地に立地する。この沖積地の西には、油山山塊から派生する標高約30m程度の低丘陵が伸びてくる。昭和初めの地形図によると、旧状は水田であり、調査区西側・南側を通る生活道路が当時から存在していたことがわかる。西側の丘陵地は、多くは山林であり、墓地として記載されている部分も少なくない。大橋周辺に居住する人々の墓域であったのだろう。周辺にはため池も存在していたようである。

さて、現在に至るまで、大橋E遺跡においては、8次にわたる調査が行われている。これまでの調査結果からは、大橋E遺跡の範囲内にはロームで構成される洪積台地と、シルトで構成される沖積地が含まれており、台地上には弥生前期からの遺構、沖積地には中世前半から遺構がみられ、大橋周辺の開発がこのころ始まったことを示していると思われる。

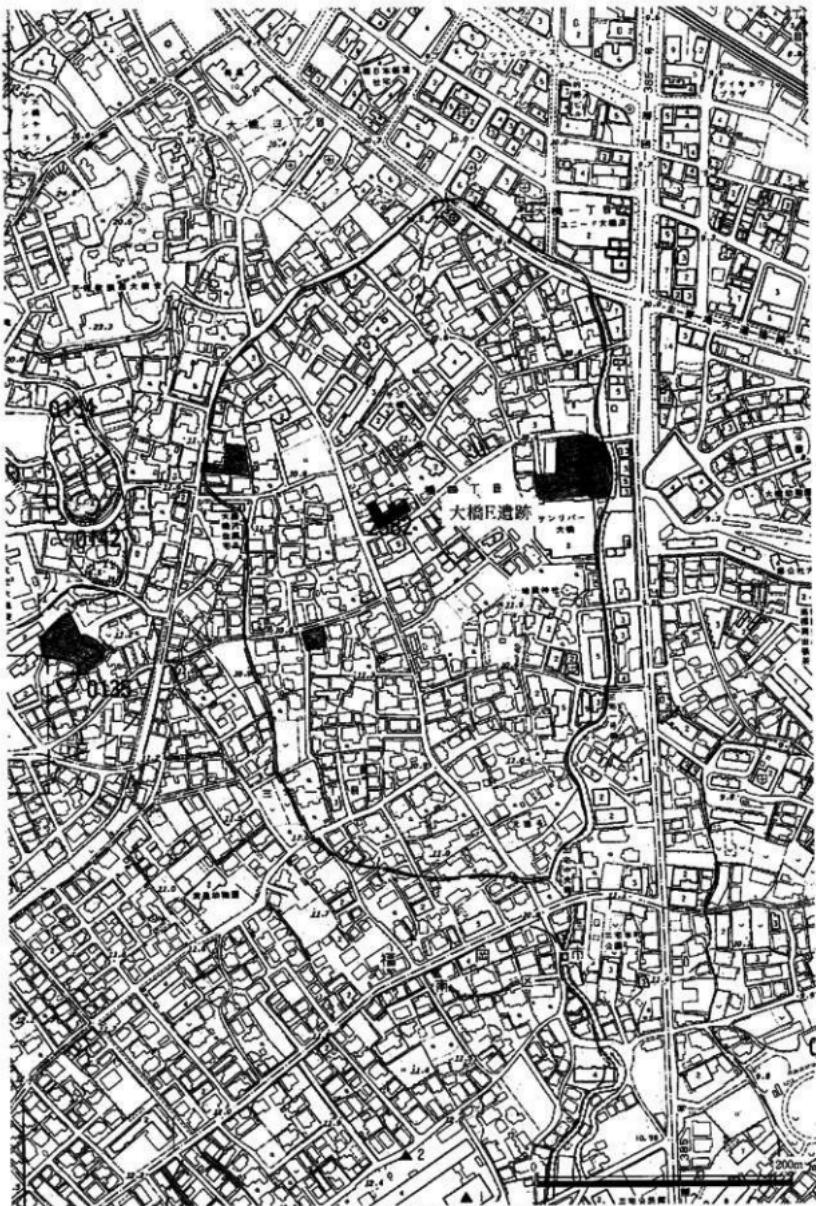


Fig. 1 調査区位置図 (1/4,000)

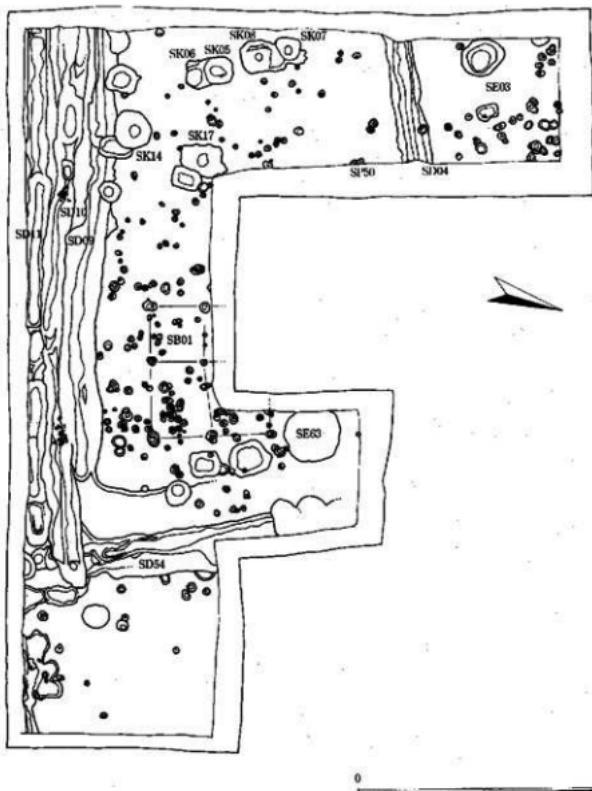


Fig. 2 調査区全体図 (1/200)

第3章 発掘調査の記録

1. 調査概要

本調査地は、福岡平野を貫流する那珂川の中流域右岸に分布する沖積低高地に立地する人跡遺跡のほぼ中央部に位置する。遺構は標高約11mの現地表面よりマイナス1~1.5m、標高約10mの明黄褐色シルト質土上にて検出される。

今回検出した遺構は、中世前半と思われる2間×2間以上の掘立柱建物・中世前半および近世初頭の溝6条・近世初頭の土壙10基・15世紀代および近世の井戸（土壙か）・柱穴多数で、遺構は調査区全体に分布する。遺構面は東に緩く傾斜する。出土した遺物はコンテナ14箱分である。主体は15世紀代および中世後半から近世初頭に位置づけられるもので全体のほぼ7割を占める。溝の埋上からの遺物が大半を占める。瓦類も遺構の埋土に混入する形で比較的多く出土している。また、黒曜石製打製石器が1点出土している。

2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物 (Fig.2・3)

SB01建物 (Fig.3)

SB01は、調査区中央部に位置する建物である。柱穴の残存状況から、全体に削平を受けているものと思われる。2間×2間の純柱建物で、南北方向3.1m・東西方向3.5mを測る。

柱穴の形状は、不整な円形を呈し、直径18~30cmを測る。柱間は、心心で南北1.4から1.6m・東西1.5から2.1mを測る。

遺物は、土師器・瓦質土器が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。建物の時期は、周囲の遺構の時期から、中世後半から近世初頭と思われる。

2) 溝 (Fig.2・4)

SD04溝 (Fig.2)

SD04は、調査区西半部・SB03井戸の南に隣接する。東西方向に掘削され、ほぼ直線的な平面プランをなす。幅1.0~1.2m・深さ0.7mを測る。断面形は不整な逆台形を呈し、土層からは少なくとも1回の刷り直しが観察される。流水・滯水の形跡は、現場では観察されなかった。

遺物は、土師器・白磁類が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。中世前半の遺構か。
SD09溝 (Fig.2・4)

調査区南端にて検出した。東西方向に掘削され、若干出入りのある平面プランを呈する。幅0.7~1.6m・深さ40cmを測り、断面は不整な逆台形を呈する。流水・滯水の痕跡は、現場では確認し得なかった。

出土遺物 (Fig. 5)

陶磁器：1は、白磁皿である。紅皿か。2/3個体残存する破片で、口径は復元で4.5cm・器高1.6cm・底径2.5cmを測る。2は、肥前系陶器の碗である。1/3個体残存する破片で、口径は復元で11.4cm・器高7.5cm・底径4.6cmを測る。口縁部に暗灰色の円文が觀察される。透明感ない灰黄色の釉

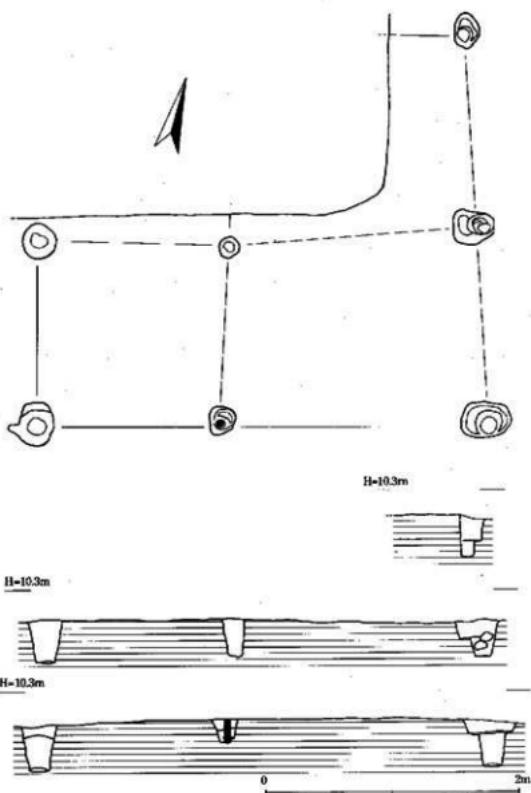


Fig.3 SB01建物実測図 (1/40)

1/3個体残存する破片で、底径は復元5.5cmを測る。内面見込みに柳文と思われる文様を施す。

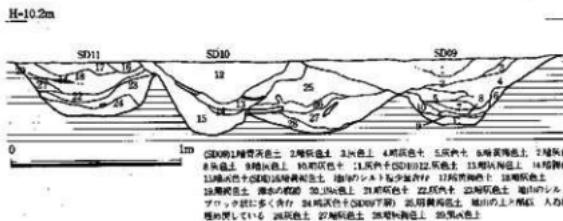


Fig.4 SD09・10・11溝土層断面実測図 (1/30)

が施釉される。3は、肥前系陶器の碗である。1/3個体残存する破片で、口径は復元で11.4cm・器高6.4cm・底径4.0cmを測る。透明感ない暗褐色の釉が外面上半2/3程度まで施される。4は、肥前陶器の皿である。1/10個体残存する破片で、口径は復元で11cmを測る。5は、肥前系の青磁皿である。1/2個体残存する破片で、口径は復元で13.4cm・器高3.6cm・底径4.6cmを測る。内面見込みの釉を輪状に焼き取り、高台部分は露胎とする。6は、肥前系磁器の染付である。口縁部の小片。近代以降の所産か。7・8は肥前磁器の染付皿である。底部の小片で、底径は復元6.2cmを測る。内面見込みに花卉文と思われる文様を施す。8は、肥前陶器の皿である。

2/3個体残存する破片で、復元口径13.4cm・器高4.3cmを測る。内面見込みの釉を輪状に焼き取り底部を露胎とする。10は、肥前系の染付皿で、口縁部を欠失する。底径5.0cmを測り、内面に圓

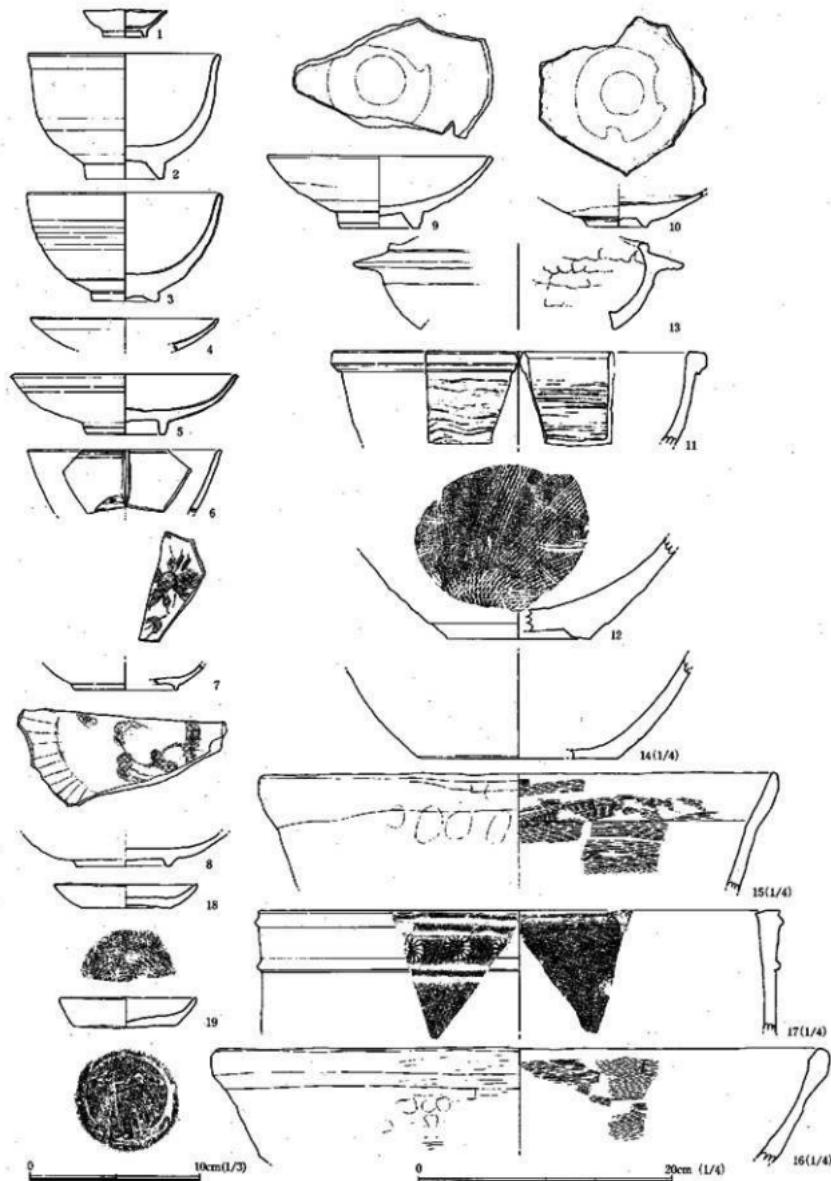


Fig.5 SD09溝出土土器実測図 (1/3・1/4)

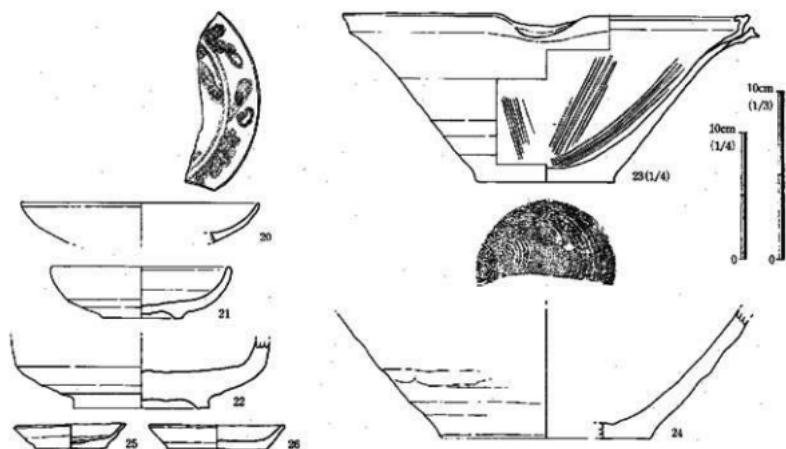


Fig.6 SD10溝出土土器実測図 (1/3 · 1/4)

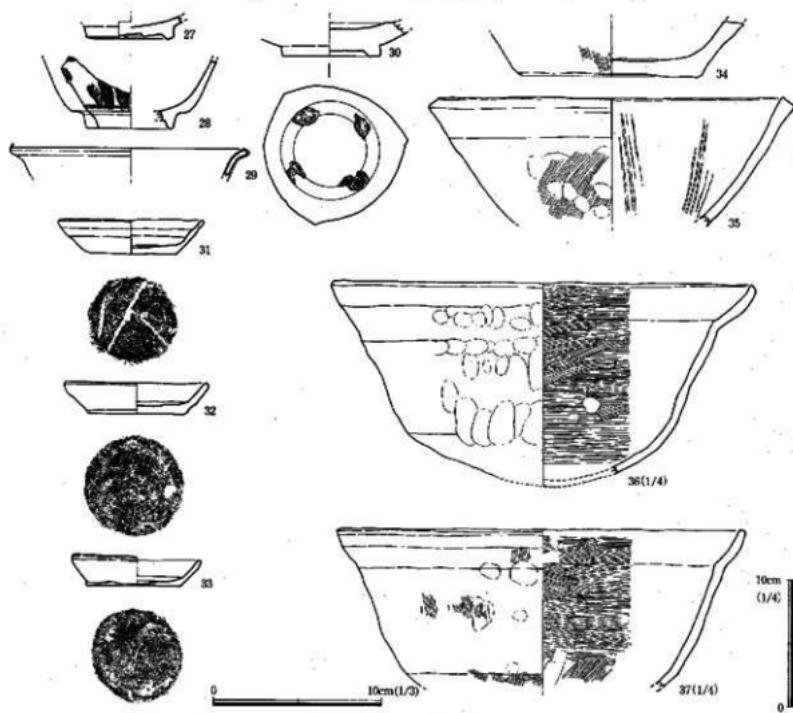


Fig.7 SD11溝出土土器実測図 (1/3 · 1/4)

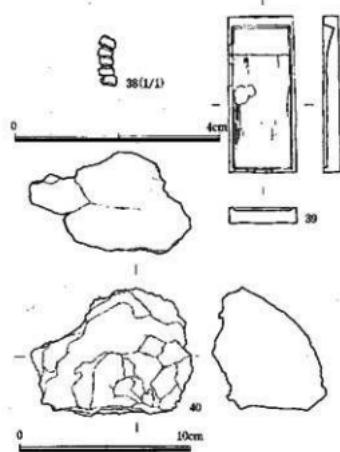


Fig.8 SD11-54溝出土遺物実測図 (1/3-1/1)

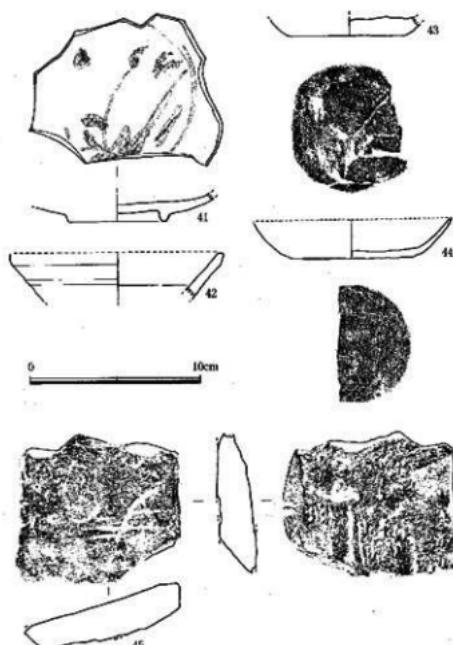


Fig.9 SD54溝出土遺物実測図 (1/3)

線を有する。11・12は、肥前陶器の鉢である。11は、口縁部の小片で、両面に白土で刷毛目が施される。12は、擂鉢である。

土師器：13は、土師器土器の羽釜である。突堤部径26.0cmを測る。14は、土師質上器の鉢である。復元底径17.0cmを測る。15・16は、土鍋である。15は復元口径41cmを測る。16は、口縁外面にまで炭化物が付着する。18・19は、小皿である。18は、1/2個体残存する破片で、復元口径8.7cm・器高1.4cmを測る。19は、ほぼ完形で出土した。口径8.1cm・器高1.8cm・底径8.1cmを測る。

これらの遺物から、SD09の時期は、17世紀後半から、18世紀代と思われる。

また、SD09・10に切られ、検出面に姿を現さない溝を、上層断面から確認した。埋土は黒色土を主体とし、

遺物は、内面にスタンプを有する龍泉窯系青磁碗・格子目の叩きを有する平瓦片が出土し、近世以降の遺物は皆無であった。時期は15世紀代におさまると思われる。

SD10溝 (Fig.2・6)

調査区南端にて検出した。SD09溝にはほぼ並行し、東西方向に掘削される。若干出入りのある平面プランをなし、幅0.6から1m・深さ0.4mを測る。

出土遺物 (Fig.6)

陶磁器：20は、肥前系の染付皿である。口縁で1/3残存する小片で、復元口径14.0cmを測る。21は、肥前系陶器の皿である。1/2個体程度残存する破片で、復元口径10.4cmを測る。22は、肥前系陶器の碗である。底部を1/2残す破片で、内面見込みにスタンプによる文様を施す。23は、肥前陶器の擂鉢である。1/3個体残存する破片で、底径10.7cm・復元口径32.4cm・器高13.1cmを測る。

瓦質土器：24は、擂鉢である。底部から全体部にかけての小片。

土師器：25・26は、小皿である。

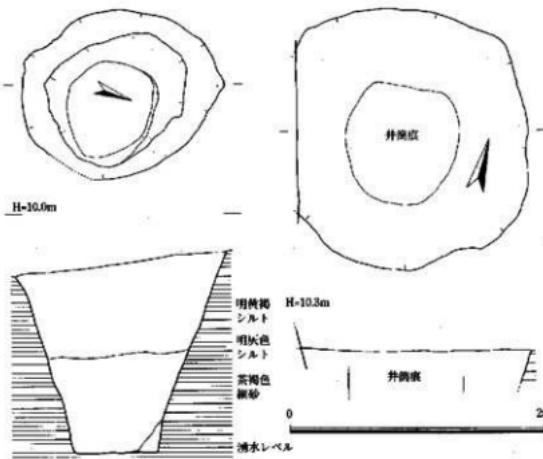


Fig.10 SE03・63井戸実測図 (1/40)

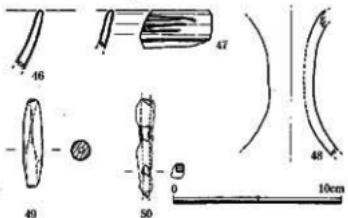


Fig.11 SE03井戸出土遺物実測図 (1/3)

以上の遺物から、SD10溝の時期は、17世紀前半頃と思われる。

SD11溝 (Fig.2・4)

調査区南端にて検出した。SD10溝に切られる。SD09・10溝にはほぼ並行して東西方向に掘削され、幅0.6から0.9m・深さ0.3mを測る。若干出入りのある平面プランをなし、断面形は隅丸逆台形を呈する。土層断面からは、流水・滌水の痕跡は確認できなかつた。

出土遺物 (Fig.7)

陶磁器：27は、白磁碗である。底部のみ完存する破片で、底径4.2cmを測る。高台部は露胎。28は、肥前系の染付碗もしくは小杯である。底部から体部にかけての小片で、疊付をのぞく全面に施釉される。外面に濃青色の文様が観察される。29・30は、龍泉窯系青磁である。29は、口縁部の小片で、釉薬は2層をなす。30は、底部が完存する破片で、疊付に4カ所の胎十目が観察される。透明感ある淡黄緑色の釉が薄く施される。

土師器：31・32・33は、小皿である。いずれの個体も磨滅が激しく、外表面調整はほとんど観察できない。

31は、4/5個体残存する破片で、口径8.5cm・器高2.1cm・底径4.9cmを測る。底部には回転糸切り痕がわずかに残る。32・33は、完形で出土した。32は、口径8.4cm・器高1.7cm・底径5.8cmを測る。底部には回転糸切り痕がわずかに残る。33は、口径7.8cm・器高1.6cm・底径5.3cmを測る。底部には回転糸切り痕がわずかに残る。34・35は、上質灰土器である。34は、鉢の底部である。底径10.3cmを測り、外面には縱方向の刷毛目が観察される。35は、擂鉢である。口縁部から体部にかけての小片で、内面には、5条1单位の指目が施され、所滅しているものの斜め方向のハケメが観察される。36・37は、土鍋である。36は、体部を一部欠くもののほぼ完形で出土した。口径34.0cm・器高16.5cmを測る。外面には指押さえ痕がみられ、炭化物が顕著に付着する。内面は、横方向の細かいハケメが施される。底部はナデ調整。37は、1/4個体程度残存する破片で、底部を欠く。口径は、復元で32.4cmを測る。外面は、炭化物が顕著に付着する。内面は、横方向の細かいハケメが施される。

鉄滓：40は、碗形滓である。鍛冶滓か。重量531.8gを測る。

ガラス製品：38は、ガラス球である。4個の玉が連なった形で、鮮やかな淡青緑色を呈する。全長

1.0cm・重量0.14gを測る。

以上の遺物から、SD11溝の時期は、中世後半頃と思われる。

SD54溝 (Fig.2)

調査区東半部にて検出した。今次調査にて検出した溝の内で唯一、南北方向に流れる溝である。斬り合い状況を見ると、SD09・11溝と切り合うが、十層断面の観察からは、先後関係を明らかにし得なかった。遺物の組成は、SD09・54溝についてはほぼ同様であり、1条の溝となる可能性が高いが、ここでは暫定的に別々に報告する。幅1.4から1.7m・深さ15cmを測り、東側に幅0.5から0.9mのテラスを設ける。平面プランは出入りが少なく、25°西に偏して直線的に伸びる。

出土遺物 (Fig.9)

陶磁器：41は、肥前系磁器の染付である。体部および口縁部を欠く破片で、2/3個体程度残存する。底径5.7cmを測る。内面見込みに草花文をもつ。42は、肥前陶器の碗である。口縁部の小片で、復元口径12.4cmを測る。胎上は明黄褐色を呈し、透明感ある釉が薄くかかる。

土師器：43は、底部の破片である。鉢類か。底径6.7cmを測る。磨滅が激しいが、回転糸切り痕がわずかに残る。44は、壺である。1/5個体残存する破片で、復元口径11.8cm・器高2.2cm・底径7.1cmを測る。底部に回転糸切り痕が観察できる。

瓦：45は、平瓦である。一方に端面を残す破片で、凹面に布目、凸面に繩目叩き痕がみられる。

甕：39は、赤開石製甕である。ほぼ完形で出土。長辺0.93cm・短辺4.0cm・厚さ0.9cmを測る。海部に薄く墨が残る。

3) 井戸 (Fig.2・10・11)

SE03井戸 (Fig.2・10, PL.3-1)

調査区北端部、SD04溝に近接して検出した。平面プランは、不整な楕円形を呈し、長径1.68m・短径1.4m・深さ1.64m・底径0.5mを測る。埋上は黒褐色で、底部に近づくに従って粘性を増し、底部付近では粘土に近くなる。底部はほぼ平坦で、井筒の痕跡は、現場では確認できなかつた。

出土遺物 (Fig.11)

陶磁器：46・47は、龍泉窯系青磁碗である。いずれも口縁部の破片で、46は、口縁部外面に1条の沈線を巡らし、透明感ある茶緑色の釉が厚く掛かる。47は、外面に雷文帯を有する。透明感ある青緑色の釉が掛かる。48は、褐釉陶器の壺部である。最小径2.6cmを測り、胎上は暗灰色を呈する。外面および内面の半ばまで、透明感ない黒褐色の釉が薄く施釉され、全体に氷裂を有する。

土師器：49は、土壺である。完形で出土した。全体に赤褐色を呈し、槽長5.2cm・最大幅1.1cm・孔径3mmを測る。焼成は良好で、胎土は精良である。

鉄製品：50は、釘もしくは鉄鎌の茎部と思われる。断面形は隅丸方形を呈し、全長5.8cmを測る。全体に錆化がすすむ。

SE63井戸 (Fig.2・10)

調査区中央を新たに拡張した際に検出した。調査期間が差し迫っていたため、完掘には至らなかつた。平面プランは不整な円形をなし、直径2.08mを測る。中央部に井筒痕を検出した。不整な円形をなし、長径1.0m・短径9.4mを測る。遺物は、肥前系陶器・無文の平瓦片が出上した。近世以降の所産か。

これらの他に、3基以上の井戸を検出したが、壁面に接しており、崩落の危険があつたため、完掘

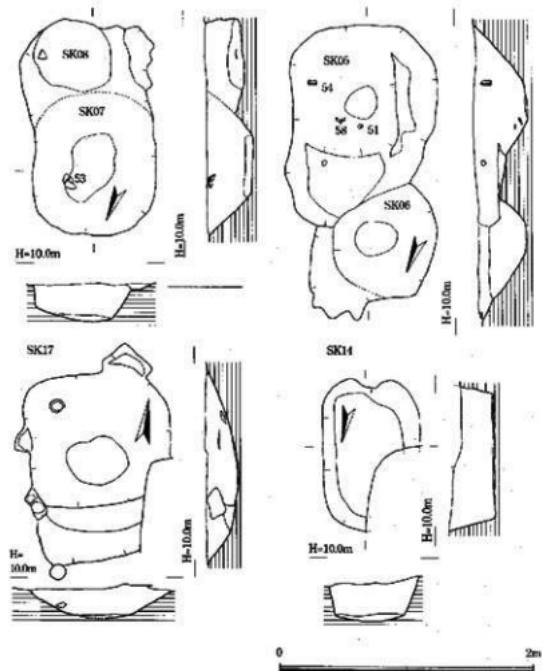


Fig.12 SK05・06・07・08・14・17土壤実測図 (1/40)

である。土師質で、脚部および吻端部を欠失する。胴部には粘土が貼り付けられ、上部には人形が乗っていたものと思われる。

瓦質土器：55は、捏鉢である。注口部が残る破片で、外面は指押さえ、内面はヨコハケで仕上げられる。内外両面ともよく焼しが掛かる。

これらの遺物から、SK05土壤の年代は、17世紀前半から中葉と思われる。

SK06土壤 (Fig.12)

調査区西側にて検出した。SK05に切られる。平面プランは不整な円形を呈し、径1.06m・深さ0.4mを測る。埋土は淡灰色。遺物は、出土しなかった。

SK07土壤 (Fig.12)

調査区西側にて検出した。平面プランは不整な円形を呈し、径1.06m・深さ0.4mを測る。

出土遺物：53は、肥前磁器の染付皿である。1/2個体残存する破片で、口径13.6cm・器高3.8cmを測る。内面に虫文を描く。17世紀前半から中葉か。

SK08土壤 (Fig.12)

調査区西側にて検出した。SK07に切られる不整形の土壤である。幅1.1m・深さ0.33mを測る。遺

していない。肥前系の陶器・平瓦片・土師器が出土し、近世以降の所産と思われる。

4) 土壙 (Fig.2・12~14・PL・2.2~4)

13基検出した。本報告では、実測可能な遺物の出土した土壤を中心に報告する。

SK05土壤 (Fig.12)

調査区西側にて検出した。SK06を切る。平面プランは不整梢円形を呈し、長径1.8m以上・短径1.26m・深さ0.45mを測る。埋土は淡灰色を呈する。

出土遺物 (Fig.13・14)

陶磁器：51は、肥前磁器の染付碗である。体部の小片で、断面形は丸みを帯び、外面上に文様が施される。

土師器：54は、鉢である。

II縁部の小片。58は、土馬

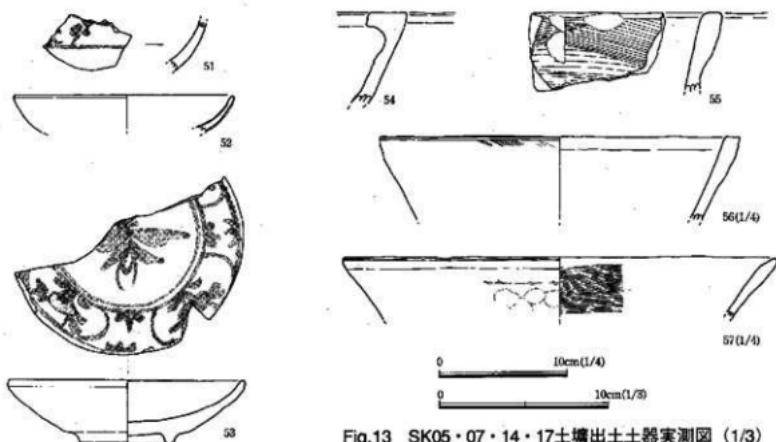


Fig.13 SK05・07・14・17土壤出土土器実測図 (1/3)

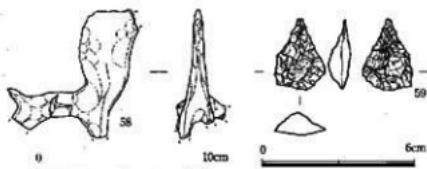


Fig.14 SK05土壤出土
土馬実測図 (1/3)

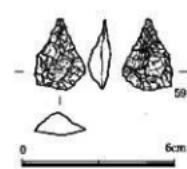


Fig.15 SP50ピット出土
石鎚実測図 (1/2)

SK17土壤 (Fig.12・PL.3-3)

調査区西側にて検出した。SK16土壤に切られる。平面プランは不整な長方形を呈し、長辺1.58m・短辺1.26m・深さ0.26mを測る。断面形はスリバチ状。

出土遺物：52は、染付皿である。口縁部から体部にかけての小片で、復元口径13.0cmを測る。

5) 柱穴出土の遺物

59は、黒曜石製打製石鎚である。SP50柱穴から出土。器長2.7cm・器幅2.0cm・器厚0.9cmを測る。

3. まとめ

今回の調査で検出された遺構は、15世紀代・中世後半から近世初頭の2時期に分かれる。15世紀代に属する遺構はSD09下層の溝とSE03井戸である。SD09下層の溝埋没後、新たに溝が掘られるが、短期間に埋没し、それを切って土壌がつくられるが、それより新しい遺構は、検出できなかった。SD10とSD54が同一の溝とすると、溝に周囲され、掘立柱建物と井戸がセットになる屋敷地が想定できる。このことから、調査地周辺は15世紀代から開発が始まり、中世後半から近世初頭に大きく再開発が行われたものと思われる。しかし溝が短期間に埋まり、建物も少ないとから、集落の存続期間は、さほど長くなかったものと思われる。

物は、褐釉陶器・土師器細片が出土。

SK14土壤 (Fig.12・PL.3-2)

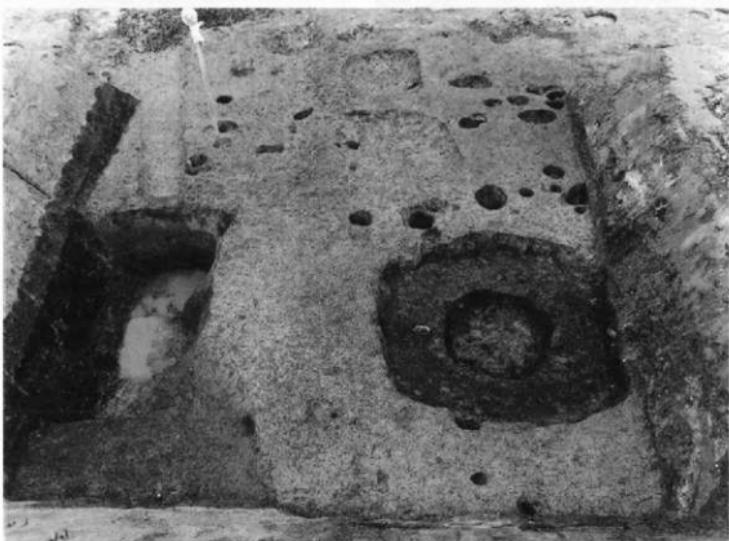
調査区西側にて検出した。SK13に切られ、SD09を切る。平面プランは小判形を呈し、長辺1.35m・短辺0.85m・深さ0.35mを測る。

出土遺物：56・57は、土師質土器の鍋である。ともに口縁部の小片。

図 版



1 調査区全景（北より）



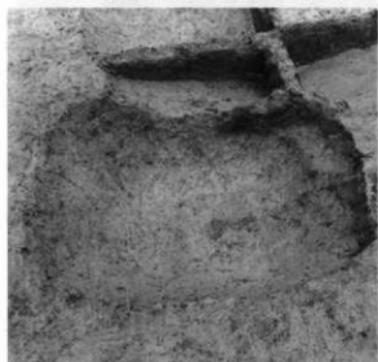
2 拡張区全景（北より）



1 SE03井戸完掘状況（西より）



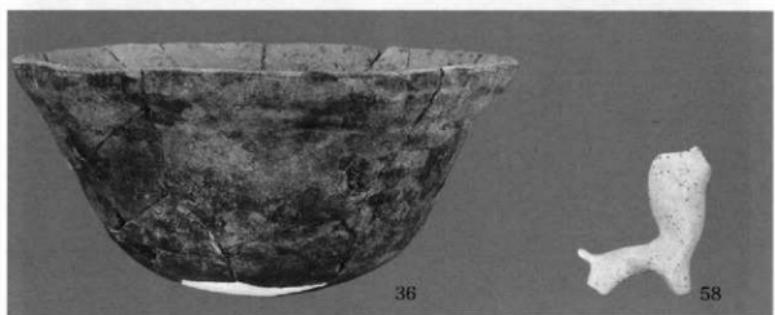
2 SK14土壤（東より）



3 SK16土壤（西より）



4 SK17土壤（南より）



5 出土遺物

大橋E遺跡 5

—福岡市南区所在大橋E遺跡第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告第740集

2003年(平成15年) 3月31日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 三栄印刷株式会社
福岡市博多区千代一丁目6番1号